

光圀本系『愚管抄』伝来考

——成簀堂文庫本・天理本・新出写本の関係をめぐって

児島啓祐

(一) 問題の所在

平安末期から鎌倉初期にかけて活躍した摂関家出身の天台僧慈円の著述『愚管抄』は、中世の政治史、思想史、宗派史、国文学の研究等々、多分野から重宝される歴史書である。しかしながら、未だに『愚管抄』の本文及び伝本に関する基礎的な研究がほとんど行われていないのが現状の大きな課題である。

近年、坂口太郎氏の提起¹⁾によって、底本をいかに選定するか、古態を残す本文はどのように見極めるべきか、『愚管抄』研究

の基幹を問いなおすことが求められている。本稿では新出写本の紹介と、その位置づけをめぐる基礎的な考察を通じて、『愚管抄』の諸本関係の一端を説明することで以上の課題に添えつつ、むしろ後出と見られる『愚管抄』の写本こそ、近世の学問交流を見据えた『愚管抄』の享受論を展開する上で不可欠な研究対象となり得ることを示したい。

近世の修史事業をめぐる学問交流に関しては、前稿²⁾において江戸幕府の命により『本朝通鑑』の編纂を担った林鶯峰と、江戸前期の好文大名、島原藩主、鶯峰の弟子でもあった松平忠房との密接な関係について、島原本の分析を通じて浮かび上がら

せたとところである。本稿では、彰考館を設立して『大日本史』の編纂事業を興した徳川光圀と、青蓮院との密接な関係が浮かび上がる写本として、成簀堂文庫本・天理本及び同系統と見られる新出の『愚管抄』写本を位置づけていきたい。

(二) 新出写本の紹介と諸本における位置づけ

まずは、新出写本（以下、和田本）の書誌を次に掲げる。

【書誌】和田琢磨氏蔵の二冊写本（巻五・六の零本）。四目綴、原装渋引き表紙（横刷毛目）、縦二七、六糎、横二〇、二糎、料紙楮紙。外題は表紙中央に打付書で「愚管鈔^五」「愚管鈔^六」とある。巻五の表紙右肩には直書で「重本」とあり、「此巻重本ニナル」の貼紙がある。内題は、一丁表冒頭に「愚管鈔五」とある。扉に別筆で「愚管鈔第五」と見える（巻六には見えない）。巻六は一丁表に「愚管抄」とある。小口（地）にも、「愚管鈔五」「愚管鈔六全」とそれぞれ見える。蔵書印は、外題の下部に、朱の長方印（縦二、四糎、横二、七糎）「談峰寿命院印」、一丁表に朱の正方印（二辺五、九糎）「青蓮王府」が捺されている。和田本と同様の蔵書印を有する七冊揃いの

伝本が天理図書館に所蔵（村岡典嗣氏旧蔵）^③ されていることは本書の位置づけを考える上で注目される。巻五、五十二丁。巻六、四十八丁。巻五の裏表紙見返しの内側に「私考引 古日巧者」とある。本文片面片仮名九行書写。

片面九行書写でかつ片仮名の写本で現在知られているものは、島原本甲本巻四〜七、阿波本、天理本である。特に和田本は、傍線部に示した通り、蔵書印が共通していることから天理本と密接な関係にあると目される。

従来、天理本はほとんど研究の俎上にあげられたことがない。村岡典嗣氏^④により校訂の参考になる写本として紹介された後、塩見薫氏^⑤によって彰考館本との近似性が指摘され、具体的に校訂上参照すべき箇所（後述）が提示されたのみである。本文の性格や伝来史的な位置づけが不明なままであり、和田本の出現によって、あらためて、天理本の性質や意義が浮かび上がるものと考えられる。

天理本及び和田本を位置づけるにあたり、注目すべき写本が成簀堂文庫^⑥に所蔵されている。成簀堂本の箱書に「天和二年五月廿三日水戸中納言^{光圀}進呈之」と見えるため、本稿では以下、光圀本と呼ぶことにしたい。光圀本の一丁表には「青蓮王府」



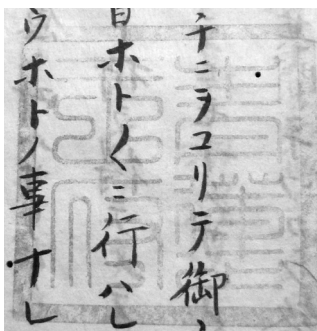
和田本巻六



和田本巻五



「談峰寿命院印」(巻六)



「青蓮王府」(巻五)

の蔵書印が捺されていることから、光圀が青蓮院に寄進した一本であったことが知られる。ただし、光圀本には多武峰の蔵書印はなく、片面一〇行書である。

光圀が青蓮院に『愚管抄』を寄進したことについては、天理本巻一扉裏に見える次の書写奥書が参考になる。

五百年忌、弔享保九甲^レ於青御門主執行^レ愚管抄七卷慈鎮和尚作也^レ元禄年中^レ水戸黄門^レ光圀公写^シ青蓮院尊証親王^{江被^レ進^セ}享保第十一年丙午秋奉^リ請^ニ粟田口御本^ヲ臆写^了
^ヌ談峰蓮光院光栄(天理本巻一)

天理本の奥書によれば、天理本の親本は徳川光圀が元禄(一六八八—一七〇四)年中に書写し青蓮院尊証親王に進呈した写本、すなわち光圀本であったことが判明する。「粟田口御本」すなわち光圀本を、享保一一(一七二六)年に多武峰の塔頭、蓮光院の光栄という学僧が書写した、とある。蓮光院乃至光栄と、同じく多武峰の塔頭である寿命院との関係は現状不明であり、「談峰寿命院印」の伝来事情は未詳ながら、少なくとも以上の識語によって、青蓮院と多武峰の繋がりは確かめられる。青蓮院の光圀本を写した際に「青蓮王府」が捺され、多武峰に

蔵された際に「談峰寿命院印」が捺されたということは確実である。ここで注意すべきは、和田本にも同じように二種の蔵書印が認められることである。

つまり天理本及び和田本は、書承関係にはなく、その都度、親本の光圀本を参照して書写されたことになる。したがって両者は親子ではなく、兄弟関係にあると目される。以下、三種の写本を光圀本系と呼ぶことにする。

以上の見通しに立つて、本節では以下、巻五を中心とする校異によって、和田本が、形態面のみならず、光圀本系の本文を有する写本であることを示しておきたい。比較するのは、光圀本系三種に加え、次に掲げる江戸初期—中期における主要な写本六種である。引用する際には当該写本の名称の頭文字で示す。

【図書寮本】(函号…三五〇—三二六(複四二五七)) 文明八(一四七六)年の本奥書を有する江戸初期の写本であり、国史大系の底本である。文明本系の最古写本である。

【紅葉山文庫本】(函号…特一〇七—〇〇〇二) 国立公文書館内閣文庫所蔵の近世初期の写本である。図書寮本とは親子乃至兄弟関係にあり、文明本系の一本である。

【東洋文庫本】(国文学研究資料館紙焼請求記号N三〇五二二) 東洋文庫所蔵で、紅葉山文庫本と行取りも含め極めて近い

本文を有する文明本系の写本である。卷二、六、七を欠く残欠本である。

〔林家本〕（函号…一三八—〇〇五六）国立公文書館内閣文庫所蔵で、元は紅葉山文庫本の副本として作られた林鶯峰旧蔵の写本である。寛文（一六六一—一六七三）年間の写しである。文明本系と近似するものの、まま校訂が加えられ、片仮名表記や漢字表記の増加が顕著な江戸前期の写本である。後に卷二を後補した取り合わせ本である。

〔彰考館本〕（国文学研究資料館マイクロ番号七三—三二—三一）彰考館文庫所蔵の延宝六（一六七八）年の書写奥書を有する一本である。卷一・三が一二行平仮名・漢字交じり表記、卷四・七が一〇行片仮名・漢字交じり表記の取り合わせ本である。光圀の修史事業において蒐集された写本の一つであり、卷四・七は林家本と近似する本文である。表紙等の形態面は光圀本に極めて近く、彰考館本の傍注を踏まえ修訂された本文が光圀本と位置づけられる。

〔滋野井本〕（函号ヤ—一七六）国文学研究資料館所蔵の新出写本である。帙左肩題箋に「愚管抄 寛永享保写 滋野井公澄旧蔵 七冊」とある。片面一二行書写で、漢字平仮名・片仮名交じり表記であり、卷二末尾には彰考館本と同じ文

面の本奥書が認められる。彰考館本を親本とする江戸中期の写本である。

〔天理本〕（函号二一〇イ二七）天理図書館所蔵。前述。

〔和田本〕（個人蔵） 前述。

〔島原本〕（函号三五八—二七七—四）肥前島原松平文庫所蔵。卷一は正和二（一三三三）年、卷三は貞治六（一三六七）年の本奥書を有する一〇行書であり、卷四・七は林家本を底本とする九行書、重複している卷一と、同じ形態を有する卷二の二冊は東山御文庫蔵の一卷本（函号勅封一二〇—二六）に近似する本文を有する八行書である。松平忠房の蔵書印を有しており、江戸前期の写しであることが認められる。

次に掲げる「『愚管抄』卷五 校異」は、天理本以後に書写されたことが確実な天明本（国文学研究資料館蔵函号ヤ二—一二七）及び河村本（名古屋市立舞鶴中央図書館蔵 国文学研究資料館マイクロ番号八〇—八九—五九）を除いた江戸初期から中期に掛けての主要な写本の内、特に異同が認められる箇所を、一九箇所抽出して比較したものである。和田本と一致する本文に傍線を施した。該当箇所については参考までに日本古典

文学大系『愚管抄』の頁数も付した。

『愚管抄』巻五 校異

- (1) 紅・東・島・林・彰・滋・光「ヲハマシテ」、和・天・
図「ヲハシマシテ」(大系二二五頁「ヲハ(シ)マシテ」)
- (2) 図・紅・東・島・林「以テ参リテワタナントシケリ」、
彰・滋・光・和・天「持テ参リテワタシナントシケリ」(滋・
和ともに「ナ」の傍記に「サカ」とある)(大系二二九頁「ワ
タ(シ)ナンドシケリ」)
- (3) 島「リタセテ」(別筆で横画を加え「サ」に作る)、図・
紅・東・林・彰・滋「サタセテ」、光・和・天「サマセテ」
(大系二三〇頁「サタセデ」)
- (4) 図・紅・東・島・林・彰・滋・光・和・天「マユト
シク」(和のみ、「ユ」の傍記に「コカ」とある)(大系
二三〇頁「マコトシク」)
- (5) 図・紅・東・島・林・彰・滋「義朝カ子ノ頼朝ヲハ」、
光・和・天「義朝ヲハ」(和、「義」の傍記に「頼カ」とあ
る。天は貼紙で「義朝 原本」と示す。)(大系二三八頁「義
朝ガ子ノ頼朝ヲバ」)
- (6) 図・紅・東・島・林・彰・滋「サテ主殿^{二條院}」、光・和・
天「去^テ主殿^{二條院}」(和のみ「テ」がない。)(大系二三九頁「サ

テ主上^{二能院})

- (7) 図・紅・東・島・林・彰「大切ナリニテ」、彰「大切
ナリキ^トテ」、滋・光・天・和「大切ナリトテ」(大系二四〇
頁「大切ナリニテ」)
- (8) 図・紅・東・林・島「シロシメサン」(図、東は平仮
名、彰・滋・光・和・天「シロシメサレン」)(大系二四二
頁「シロシメサ(レ)ン」)
- (9) 図・紅・東・島・林「信仰シタリケルヘハヤ」、彰「信
仰シタリケル・ヘハヤ(・右傍に「ウ」)、滋・光・和・
天「信仰シタリケルウヘハヤ」(大系二四三頁「信仰シタ
リケルヘ、ハヤ」)
- (10) 図・紅・東・島・林「瘡カミテ」、彰「瘡カ^ヤミテ」、滋・
光・和・天「瘡ヤミテ」(大系二四四頁「瘡ヤミテ」)
- (11) 図・紅・東・島・林「器量ト云モノ一ニソ大切ナレ」、
彰「器量ト云モノ一ニソ大切ナレ(・右傍に「コ」)、滋・
光・和・天「器量ト云モノ一ニソ大切ナレ」(大系二四七
頁「器量ト云モノ一ニソ大切ナレ」)
- (12) 図・紅・林・島「ヤスラヌコト」、東「ヤスコト」、
彰「ヤスラ・ヌコト(・右傍「カ」)、滋・光・和・天「ヤ
スラカヌコト」(大系二五〇頁「ヤス(カ)ラヌコト」)

- (13) 紅・島・林・彰・滋「フカクノミタル」、東「フカクミタル」、図・光・和・天「フカクタノミタル」(和、「頼」と漢字表記)(大系二五二頁「フカク(タ)ノミタル」)
- (14) 図・紅・東・滋「上下ノ御ノ内」、林・島・彰・光・和・天「上下ノ御ノ内」(大系二五二頁「上下ノ御ノ内」)
- (15) 図・紅・東「鎧・カブト」、島・林・彰・滋・光・和・天「冑・甲」(大系二五二頁「冑・甲」)
- (16) 図・紅・東・島・林・彰・滋「宗盛ソ家ヲ嗣テ沙汰シケル」以下、六行十三行半分の空白、光・和・天「空白なし」(大系二五三頁)
- (17) 図・紅・東・島・林「内ラクミ」、彰「内グミ」、滋・光・和・天「内ラクシ」(大系二五四頁「内ラクシ」)
- (18) 図・紅・東「ヒシト」、島・林・彰・滋・光・和・天「ヒトシト」(大系二五八頁「ヒシト」)
- (19) 図・紅「頸トリテ木曾ノ」、東・島・林・彰「頸トリテ木曾ノ」、滋・光「頸トリテケリ木曾ノ」、和・天「頸トリテケリソノ」(大系二六二頁「頸トリテキ。ソノ」)

これによれば、諸本で異同が多い箇所においても、光圀本系の本文はおおよそ一致する。三本のみ一致する場合は、(3)・(5)・

(6)・(11)・(16)のように五例見られる。ただし、底本の光圀本を写す際に、天理本や和田本では校訂が加えられていることは、(1)や(19)によって見出せる。

さらに、光圀本系にもう一本を加え、四種の写本が一致する場合を次に確認したい。

光圀本系・図書寮本が一致する場合…一例(13)

光圀本系・滋野井本が一致する場合…七例(2)・(7)・(9)・

(10)・(11)・(12)・(17)

図書寮本は諸本中では比較的本文の乱れが少ない良質な古写本(近世初期)である。滋野井本は彰考館本を底本とする本文で、校訂が多く加えられた近世中期の本文である。同じく彰考館本を底本としつつ、右傍の書き入れを参照しながら校訂した本が光圀本であることは、(9)・(10)・(11)・(12)・(17)によって知られる。彰考館本は延宝六(一六七八)年に巻二を京都の菅原為庸から借り受けて書写し、完成に至った取り合わせ本文であり、平仮名及び片仮名表記や異なる行数が混在する様態(巻一・三が二行平仮名書、巻四から七は一〇行片仮名書(巻四に平仮名が混じる)、巻二は一〇行片仮名書)であり、七分分の空白箇所が見ら

れる等の本文の乱れ（6）も見られるが、青蓮院に寄進された光圀本においては、片面一〇行、片仮名表記へと統一され、本文が整えられている（表紙は彰考館本に近似）。こうしたことから、光圀本は、青蓮院尊証親王へ寄贈するにあたり清書された校訂本であったこと、光圀本を多武峰の学僧がさらに校訂しながら写したものが天理本及び和田本であったことがわかる。

和田本及び天理本の校訂の跡は右傍や貼紙の注記に残されている。次節では注記に着目して、和田本と天理本の関係やその性質について考察を深めていきたい。

(三) 和田本と天理本の関係——原本注記に着目して

前節では和田本と天理本の類似点を多く示したが、一方で両者には用字表記・本文内容の異同も確かに認められる。そのことは、この二本が兄弟関係にあつて、底本を写す際に、校訂を積極的に加えたか否かの書写態度の違いに起因するようと思われる。

天理本と和田本の関係を論じる前提として、まずは両者が同じ書架に置かれていて、巻五と六の入れ替わりが起きていることについて述べておく必要がある。両本が同じ場所に所蔵され

ていたと考える根拠は、次に掲げる「重本」をめぐる貼紙や表紙右肩の直書である。和田本巻五の表紙に、「此巻重本ニナル」の貼紙や、右肩に直書の「重本」の文字が見えるのと全く同様、実は天理本の巻六の表紙の右肩にも「重本」と見えるのである。すなわち、「重本」と書かれている和田本巻五及び天理本巻六が本来の一組であったと考えられる（以下、この二冊を重本と呼ぶ）。とすれば「談峰蓮光院光栄」が享保一年に写した本は、天理本巻一〜五・七及び和田本巻六であったことになる（以下、この七冊を光栄本と呼ぶ）。上述の内容を整理したものが次に掲げる表である。

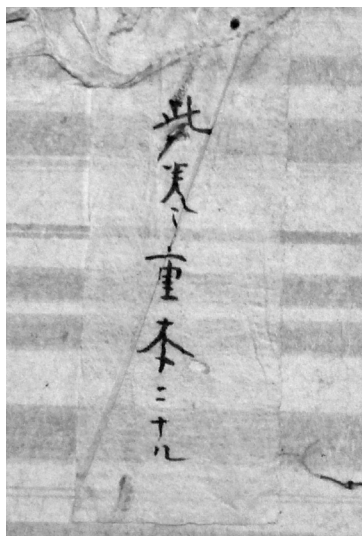
	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七
光栄本	天理本	天理本	天理本	天理本	天理本	和田本	天理本
重本	—	—	—	—	和田本	天理本	—

以上のように、同じ書架にあつて、本が混ざつてしまい、さらに別々に流出したと見られるのは、親本である光圀本との比較によつて書写態度の違いが明白に浮かび上がるからである。

前者の重本は、行取りは全く意識されずに書写されており、本文は比較的親本を尊重して写されているものの、漢字表記の



和田本巻六 表紙



和田本巻五 表紙

増加が多く起きている。一方、後者の光栄本は、光圀本とほとんど行末の文字が一致しており、仮名表記も含めて忠実な書写が行われているが、時折大きな校訂の跡も見出せる。

両者の書写態度の違いについて、以下、本節では、重本巻六及び光栄本巻六の比較を通じて具体的に示していきたい。

重本巻六には、右傍や貼紙に、青蓮院所蔵の原本、すなわち光圀本がどのような本文であったかを知る手掛かりが残されている。たとえば、光栄本巻六（四丁表・七行目）「能保イモウトノ男」と、重本の当該箇所では「能保妹^{イモウト}トノ夫」とある。つまり光圀本では、「イモウト」であったところを、重本では「妹ト」と表記変更されたことを示している。一方で、光圀本に「夫」とあったところを光栄本では男に校訂され原文が右傍に残されている。用字表記は忠実ながら本文内容が改変される特色が光栄本には認められる。他の原本注記の事例も以下に、あげておきたい。

重本巻六の「本ノマ、」注記

- (a) 光栄本四丁表八行目「ソノイモウトノ腹ノムスメ、」
重本「其妹^{イモウト}ノ腹ノ娘^{ムスメ}」
- (b) 光栄本一〇丁裏五行目「院モ今ハヤウ／＼、重本「院

モ今ハ漸々」※傍記は朱

(c) 光栄本一〇丁裏七行目「タシカナルユルサレモ」、重本「慥ナル免サレモ」※傍記は朱。

(d) 光栄本一二丁裏七行目「頼朝カ拝賀ノトモ」、重本「頼朝カ拝賀ノ供」

(e) 光栄本一九丁表三行目「摂政ニナリテ」、重本「摂政ニ成テ」

(f) 光栄本二〇丁裏八行目「アカ金サイク」、重本「銅細工」

(g) 光栄本二四丁裏五行目「摂政ノムスメ」、重本「摂政ノ娘」

(h) 光栄本二九丁裏八行目「出家ノスナハチ」、重本「スナハチ」

(i) 光栄本三〇丁裏一行目「行時ト云者ノムスメ」、重本「行時ト云者ノ娘」

(j) 光栄本三〇丁裏三行目「ムコニシタル」、重本「聾」

(k) 光栄本三二丁表六行目「ムスメアハセ」、重本「娘 アハセ」

(l) 光栄本三一丁表七行目「ムスメオホカル」、重本

「ムスメ オホカル」※以下、「ムスメ 娘」は、和田本三二丁裏七行目・八行目、三三丁表四行目・六行目、三六丁表一行目・四行目、四四丁表六行目に見られる。

(m) 光栄本四二丁裏二行目「切(以下、五字分破損)」、重本「切 伏 テ 殺 シテ」

(n) 光栄本四四丁表四行目「時子モマウケヌニ」、重本「時子モ 儲 ヌニ」

こうして見ると、重本は仮名表記に多く漢字を宛てる傾向にあり、光栄本は原本の用字表記を残しながら書写する傾向にあることがわかる。

一方で光栄本は用字表記を残しているものの、本文を修訂する傾向が顕著であることは、貼紙の注記によって確かめることができる。たとえば光栄本巻五「コノ尹明候ナシタル者ニテ」(傍線は稿者)に貼紙(本文同筆)が見られ、「者マテ 原本」とある。重本の本文は「者マテ」とあるため、用字表記はともかく、原文をそのまま書写する傾向が見られる。このように光栄本巻五には、校訂を加えた場合に、原本の本文を貼紙で注記する性質が見られる。この「元本」「原本」として書き入れられた本文が、重本の本文と一致

することは、他にも次のような例をあげることができる。

- (a) 光栄本巻五「正清ノケシキヲカサトリテ」貼紙「清正」元本、重本「清正」
- (b) 光栄本巻五「頼朝ヲ」貼紙「義朝 原本」、重本「義朝ヲ」
- (c) 光栄本巻五「立坊」貼紙「防 元本」、重本「立防」
- (d) 光栄本巻五「法住寺」貼紙「法住寺以下原本ニコトク法*(人偏+四本の横画の「主」)トアリケリ」、重本「法*(人偏+四本の横画の「主」)寺」
- (e) 光栄本巻五「僧ノア、ト」貼紙「ア、ト アニ 元本」、重本「僧ノアニト」

特に傍線を引いた(d)は特徴的なものであり、「住」の旁(横画四本)までも原本に基づいて書写しているのが、重本の特徴である。原本の光圀本を確認しても、確かに「住」の旁は、横画が四本見られる。

以上の重本巻六における傍記や、光栄本巻五における貼紙の原本注記からわかることは、以下の二点である。第一に、重本の場合は用字表記や行取りは注意していないが本文内容は原本

に忠実に写していることである。第二に、光栄本の場合は、用字表記は原文通りだが積極的に本文内容を校訂していることである。

したがって、光圀本からさらに改変が加えられた近世中期の光栄本や重本を、素性の良い本文であると見て、校訂に利用することには慎重になる必要がある。たとえば、『愚管抄』巻五の兼実の台詞、

右大臣オモヒキリテ、「一定謀叛ノ証拠ナクテ、サウナクサ程ノ寺ヲ追討ハサラニエ候ハジ。就中春日大明神日本第一守護ノ神明也。王法仏法如_レ牛角。不_レ可_レ被_レ滅」之由、愚詞申サレニケレバ、(日本古典文字大系二五〇頁)

の傍線部に見える「愚詞」に関して、かつて塩見薫氏は、光栄本に「尽_レ詞」とあることに注目し校訂の参考になることを説いたが、諸本を確認すると、光栄本を除く本は、次に掲げるように、いずれも「愚詞」なのである。

島・彰・滋・光圀・重・図・紅・東 「愚詞」
光栄本 「尽_レ詞」

光栄本と共通の親本を持ち、光栄本より本文を忠実に書写したと見られる重本や、そもそも親本の光圀本に「愚詞」とある点を踏まえれば、「尽詞」は光栄本に顕著な修訂の一環であったと見られる。

以上のように、光栄本や重本の価値は本文校訂において有益であるというよりは、むしろ、光圀が青蓮院に寄進し、多武峰の学僧が書写して伝えたという、その伝来にこそ見出されるべきであろう。伝来史的背景に関しては次節で考察したい。

(四) 尊証と光圀の関係——光栄本及び重本の伝来史的意義

重要なのは、光栄本、重本の親本である光圀本が、現状確認できる『愚管抄』の本文史上、初めて、徹頭徹尾、漢字・片仮名交じりの本文を有している見本であるという点である。『愚管抄』の享受史においては、中世の古筆資料における平仮名書⁸⁾や、近世初期の古写本における平仮名・片仮名・漢字交じり本文が中心であり、全巻通じて漢字・片仮名交じり本文を有する事例は見出し難いのである。延宝年間に彰考館の修史事業を経て蒐集された『愚管抄』の取り合わせ本をもとに、以降、天和

頃に掛けて、片面一〇行書の漢字・片仮名交じり表記に統一・清書され青蓮院の尊証に進呈された本が光圀本であった。

本節では、光圀と青蓮院の密接な交流や、光圀本の当時における重要性が、三種の光圀本系の考察を通じて浮かび上がることを指摘し、その伝来史的意義を明らかにしていきたい。

光圀が『愚管抄』を寄進した相手は、尊証親王であり、天和二年であった可能性が光圀本の箱書によって示される。一方、光栄本では「元禄年中」とする。その頃の光圀と青蓮院の交流を調べてみると、たとえば『華頂要略』門主伝第二六上「元禄二（一六八九）年九月五日条が注目される。『常州水戸薬王院』が青蓮院の末寺といえども近年中絶していたこともあり、光圀の依頼によって青蓮院の「光海」が住持として置かれるようになったという。同月の内に薬王院の山門の額が整備され、元禄三（一六九〇）年二月一日に「二王門」の額も清書された。額の表に「吉田山薬王院」、裏に「桓武天皇勅願所。二品尊証親王。我末山」と記されていたようである。同じく金堂横の額裏に「元禄庚午六月十有四日二品親王尊証書以掲。我末山吉田山薬王院金堂。」とあり、傍線に示した通り尊証親王の書が水戸の薬王院に掲げられていた。尊証の書を薬王院に掲げることが頼んだのは、「依西山宰相光圀卿請也。」とあることから、

他ならぬ光圀自身であったことがわかる。同年八月二日には御礼のために光圀から青蓮院へ「晒拾疋。海苔一箱」が進上されたという。以上のような密接な交流が、元禄期の光圀と尊証のあいだにあり、『愚管抄』の寄進もそれと無関係とは考え難い。特に尊証は、慈円に対する崇敬の厚い人物であったことが、『華頂要略』門主伝第二十六上 元禄五（一六九二）年九月二一日の記事によってわかる。慈円にゆかりの深い西山善峰寺の本堂の再興供養が、同年一二月五日に行われるにあたり、尊証は式典を祝福する書をしたためている。尊証が能書の人物であったことは、元禄七年一二月九日条の没年記事により判明する。その記事によれば、元禄七（一六九四）年一〇月一五日夜に尊証は没したらしい（したがって光圀本の青蓮院への伝来は、尊証の没した元禄七年一〇月一五日が下限）。生前尊証は、「我死当_レ瘞_二干善峰慈鎮塔之側_一。」とあるように、亡くなったときには慈円を顕彰する塔の側に埋めるように、と語っていたという¹⁰。このように慈円を強く慕う尊証親王に、「慈鎮和尚御作」『愚管抄』を贈ったことには、光圀の厚情と配慮がこめられていたと見ることができのではないか。前稿¹¹で見たように、江戸前期において『愚管抄』は希世の書であったことも踏まえば、尊証の喜びも一人であったことが推される。

ところで、伝来を考える上で、光栄本と重本の関係が特に興味深いのは、青蓮院及び多武峰の蔵書印が二本とも同じ場所に備わっている点である。すなわち、二本とも、親本である光圀ゆかりの「栗田口ノ御本」を直截に参照して写し、ともに青蓮院の蔵書印が捺されたということである。両本は寸法や表紙の模様等、外形はほぼ一致する。

すなわち、青蓮院所蔵の同じ本（光圀本）を、多武峰の学僧が、少なくとも二回は書写していたということが判明するのである。ということは、光栄本と重本は、一時は多武峰の同じ書架に保管されており、重複したために流出したことが推測される。二回書写された理由は、光栄本と重本の両者の書写態度の相違からうかがえる両本の役割の違いに求められるのではないだろうか。前者は、用字表記や行取りを底本のまま保存しているながら、「原本・元本」注記の貼紙が見られ、ところどころ本文を校訂している点で、原本への遡源を求める学問的意識が鮮明である。対して後者は、行取りは意識せず、漢字表記を増やし書写することで史書としての情報把握のしやすさ、平明性を志向しており、この点は近世中期頃に流布した『愚管抄』写本と同一の傾向を示している。両本は親本を同じくしながら、書写態度は真つ向から対立するものであり、書写意識は明確に異なる。

このことから、同一の底本による写本二種が同じ書架にあったのは両本の役割の違いに起因することが考えられる。要するに、光圀本を底本に、学問的な手続きを経た校訂本文と、視認しやすい平易な本文が相互補完的に生み出され、多武峰に伝来したものと推測されるのである。

少なくとも重本が生じるほどに、親本の光圀本が重んじられていたと考えることは充分に可能である。そのことは、光栄本と光圀本の行取りがほとんど一致する点や、本文の改変が著しいとはいえ光栄本には「原本・元本」注記の貼紙が見られる点、重本にも多数の「本ノママ」注記が書き込まれている点等々からうかがえる、親本を尊重する態度にも明らかである。先述の通り、光栄本の奥書には、徳川光圀により、青蓮院尊証親王に贈られた、「慈鎮和尚」の「御本」を、慈円の五百回忌法要が青蓮院で開催された二年後の享保一年に、「談峰蓮光院」の「光栄」が書写した、と見えることも考え合わせると、そうした位置づけはより鮮明になるだろう。以上のように、青蓮院の重要な先人である「慈鎮和尚」の「御作」であり、青蓮院ともゆかりの深い光圀や青蓮院座主尊証親王の手を経た「御本」として、光圀本が珍重されてきた様相を伝える点で、光栄本及び重本は、伝来史的意義を確かに有する本であると位置づけられる。

(五) 結語

本稿では、新出写本和田本を中心に、諸本における位置づけ及びその伝来史的意義についての考察を試みた。諸本比較を通じて和田本が天理本と近似する本文を有していることを指摘した。その上で、両本の書写態度の違いから、天理本と和田本は一部巻が入れ替わっており、それらは多武峰の学僧が行取りまで意識して書写した光栄本（天理本巻一―五七、和田本巻六）と、行取りは意識しておらずいっそう漢字表記を増やした重本（和田本巻五・天理本巻六）に整理できることを明らかにした。光栄本及び重本の原本注記（傍記・貼紙）に注目し、両本が共通の親本を持つ兄弟関係にあることを示した。両本が底本としているのが、青蓮院尊証親王に寄進された光圀本（成實堂文庫所蔵）であることが光栄本の書写奥書によつて知られる。この二本の比較対照により、用字表記や行取りは残しているものの親本の光圀本を積極的に校訂し本文を改変しているのが光栄本であり、用字表記は変更しているものの光圀本の本文を忠実に写しているのが重本であることが判明した。この二本の意義は、『愚管抄』の校訂研究に益するというよりは、光圀本を基に、まったく書

写意識が異なる写本が同じ場所でも二回作られていたことになり、両本が学問的な手続きを経た校訂本及び閲覧の便に供するために用字表記が整えられた視認しやすい本という相互補完的な役割を担って多武峰に伝来したことや、近世中期の青蓮院や多武峰における光圀本を尊重する態度がうかがえる点において、伝来史的意義が認められることを指摘した。さらに、光圀本が贈られた尊証に関して、『華頂要略』を中心に光圀との関係を考察した。すなわち江戸前期においては希世の書であり、青蓮院にゆかりの深い慈円著述の『愚管抄』が、慈円を心より慕い敬い、没後は慈円を顕彰する塔の側に埋葬してほしいと願う尊証親王に贈られるということ、それ自身が、光圀と尊証の親密な交流を物語るものであると論じた。このような光圀本やその影響力を伝える光栄本や重本は、近世における『愚管抄』享受の実態を探る上で不可欠な本であると位置づけた。本稿では十分に検討できなかったが、彰考館本と光圀本との関係をさらに実例をあげながら検証しつつ、その一歩前の段階である彰考館本と林鶯峰旧蔵の林家本の関係をも明らかにしながら、『愚管抄』の伝来史研究を通じて、近世前期の学問史の一端を今後明らかにしていきたい。

注

- (1) 坂口太郎『愚管抄』校訂私考(『古代文化』第六八巻第二号二〇一六年九月)。
- (2) 拙稿『愚管抄』本文再考―島原本の性格と意義―(『中世文学』六七号二〇二二年六月)。
- (3) 天理図書館編『天理図書館稀書目録和漢書之部 第三』『歴史科学 日本 愚管抄』(天理大学出版部 一九六〇年 一〇七頁)、請求記号二一〇―イ二七。
- (4) 村岡典嗣『増訂日本思想史研究』『愚管抄の著作年代編成及び写本』(岩波書店 一九四〇年)、初出『同題』、『史潮』九一四(一九三九年一月)。
- (5) 塩見薫『愚管抄の彰考館本・野宮本および天理本』(『史学雑誌』六五―一二 一九五六年一月)。
- (6) 徳富蘇峰氏の旧蔵の七冊本。川瀬一馬編著『お茶の水図書館蔵 新修成實堂文庫善本書目』(四〇六 愚管抄(付録首) 延宝頃写)(財)石川文化事業財団 お茶の水図書館 一九九二年 三七九―三八〇頁)。
- (7) 注(5)に同じ。注(4)の村岡氏も、天理本が校訂の参考になる旨を説いている。
- (8) 以下の①～⑤が鎌倉時代、⑥⑦が南北朝時代の『愚管抄』の断簡資料である。いずれも平仮名表記である。①『古筆手鑑大成』第十五巻手鑑 三五 愚管抄切(巻三)、②『古筆学大成』第二十四巻物語注釈二 物語 歌論 歌謡 伝九条道家筆 愚管抄切一二三―積一(巻三)、③『佐々木勇蔵コレクション 短冊優品展上』四二 伝九条道家筆 愚管抄切(巻三)、④『物語古筆断簡集成』第一部 第六八図 伝九条道家筆愚管抄 愚管抄切(巻三)、⑤『古筆切集 浄照房蔵』(大阪大学古代中世文学資料研究叢書)愚管抄切(巻七)、⑥

⑦『皇室の至宝 東山御文庫御物2』(毎日新聞社) 57 八曲小屏風(勅封八八)(二点、ツレの切が屏風に貼られている)。なお⑥⑦に関しては坂口太郎氏のご教示によりその存在を知ったものである。坂口氏の御学恩に心より感謝申し上げます。

(9)『華頂要略』巻八十四「薬王院号山山藤王トモ在茨木郡吉田郷」に、「常州吉田郡薬王院事当門跡為末寺之間被成繪旨候院中斗儀候弥興隆仏法專用候也」(稿者注…天文十七年 二月廿八日尊鎮御判 薬王院)(東京大学史料編纂所蔵写真帳 請求記号六一七二—一九〇—九一頁)とあり、薬王院は天文年間に青蓮院の末寺となったようである。この項には元禄年間の再興に際して、光圀の書簡や、尊証の文書等が確認できる。

(10)西山善峰寺には慈円の塔があったようである。『華頂要略』巻八十三には「青蓮院門首代々之塔」行玄大僧正 覚快親王 慈鎮和尚「慈道親王 尊円親王 尊道親王 尊証親王 尊祐親王」此外御東坡石臺数多アリシガ秀吉「伏見」ノ城ヲ築ク時為石垣奪取_云寺僧嘆申「テ慈鎮和尚ノ御塔婆其外少許ハ残スト云」ヘリ(東京大学史料編纂所蔵写真帳 請求記号六一七二—二一一—七八頁)と見える。卷七十八「御寺務所 西山善峰寺」にも、「慈鎮和尚」道覚親王「尊円親王」右在御塔ノ欠石「慈道親王」尊道親王「右無御塔」尊証親王「尊祐親王」右御塔巖然タリ」とある(六一七頁)。

(11)注(2)に同じ。

(12)別府節子『和歌と仮名のかたち―中世古筆の内容と書様』(笠間書院二〇一四年)「第十五章『慈鎮和尚三百年忌、五百年忌、五百五十年忌、六百年忌和歌短冊帖』について、五百回忌に奉納された和歌短冊が紹介されている。『華頂要略』門主伝第二十七之上 享保九年九月二十五日条(大日本仏教全書)に、法要の次第や参列者「おほけなく」の頭文字を取った三十一首が記録されている。

【付記】

本稿を成すにあたり、貴重な資料の閲覧・撮影・複製をご許可くださった所蔵機関関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。新出写本をご提供くださった所蔵者の和田琢磨氏には資料の閲覧・利用の御許可をいただいたのみならず、多くの御助言・ご教示を賜った。深く感謝申し上げます。